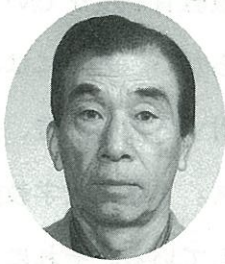


10年経った今現在の就職最新情報



東北工業大学教授

浅田 秋江

平成2年に貴協会誌の特別寄稿として「最新の就職情報」を書かせて頂いたが、10年後の現在において就職状況がいかよに変ったかを比較することが大変興味があるので早速、表に平成2年度と12年度における本学土木工学科卒業生の進路の比較を示してみた。

公務員試験の競争が激烈になってきた昨今においては、合格者の数が激減している。質的に言っても地方公務員は10年前では県上級職が多かったが、現在ではほとんどが町村役場への就職にとどまっている。

建設業並びにコンサルタントについては、10年前と現在では中央と地方業者への就職者数が全く逆転している。端的に云えば、中央業者はほとんど採用してくれないと言うことである。特にコンサルタントでは、大学院修士課程修了程度の学力を要求している。

さて、昔に比べてみて特徴的な違いは、表

の右欄に示しているように、大学院への進学者、就職不可者及び就職を希望せずという者が増えていることである。大学院進学目的の多くは学部で公務員試験に失敗したため再度の挑戦を狙うということである。一方、就職不可者と就職を希望しない者を合わせると土木工学科においては19名で約10%であるが、本学全体では20%にも達している。つまり、卒業生の5人に1人は、卒業時に進路が定まっていなかったという現状である。さらに残念なことは、入学から卒業までの間に約70から100名もの退学者が居るので、これらを併せると約30から33%、すなわち3人に1人の学生が入学して卒業してまでも進路が全く決まっていなかったという驚くべき事実である。このような傾向はわが大学においてのみでなく全国的な傾向と言うから、まさに啞然とするしかない。

表 平成2年度と12年度における進路状況の比較

	卒業生数	公務員(中央)	公務員(地方)	教員	建設業(中央)	建設業(地方)	コンサルタント(中央)	コンサルタント(地方)	道路建設	電気・通信・設備	特殊工・その他	自営	進学(大学院等)	就職不可者	就職希望せず
平成2年度	185	5	24	0	55	17	15	8	12	10	36	0	2	0	1
平成12年度	178	2	9	2	21	42	3	43	2	2	17	3	13	10	9

どうしてこんなことになってしまったのか
その主な原因を上げてみると、

1. 高校時代のゆとりある教育の弊害としての学力低下
2. 大学在学中、遊びの誘惑が多過ぎて講義に対する興味が持てず、そのため将来への目的意識が芽生えない。
3. 企業の不況に基づく採用人数の激減。等である。

昨今、少子化による入学志願者の減少のために大学間の競争が激烈となり特に私学においては生き残りをかけて入学者の争奪に躍起となっている。いきおい入学試験が甘くなり、理工系大学においてさえ、数学・物理を選択科目にしているところが多い。そのことが大学一、二年次に数学・物理の補習をしなければならないという悪循環を生んでいる。その結果、大学教授のノルマは年々急増の傾向にある。研究業績を上げなければ大学としての評価が下がる。教育の面では、これまでのように講義だけすればよいでは済まされない。

学問に興味がなく、将来に目的意識を持ってない学生に対して、少人数教育制度をしいて指導に当たらなければならない。さらには、学会活動、官庁・企業に対する技術支援、公開講座などの地域サービス。まさに大学教授の仕事は過飽和状態に達している。それにもこりず、文部省大学審議会や学術会議からのお達しで、小・中・高校での教育不足を全て大学において解消し、卒業時には、企業が要求する学力を有し、諸外国に恥じない人材に仕上げるよう命令されている。

しかし、審議会や学術会議に参画されている高名な先生方がお持ちの体力と気力は現役のほとんどの教授達は持ち合せていない。いずれ近い内に、学生より先生の方が先にギブアップするに違いない。その結果、大学に課せられたノルマはそのまま企業に持ちこされるだろう。現在のように大学で仕上がった製品をそのまま受注したのでは使いものにならず、企業において再加工しなければならない時代はそう遠くはないだろう。

